松戸の都市的變遷*

——變貌する近郊都市の一例——

山 鹿 誠 次**

1. 緒言 大都市圏の擴大に伴い、近郊の中小都市が變質し、衛星都市としての特色を帯びる例向は、最近に於ける著しい現象である⁽¹⁾。筆者は衛星都市の性格を分析するために、先に埼玉縣浦和市を例として、市民の生成と生活圏⁽²⁾、都市機能⁽³⁾、都市の地域的構成⁽⁴⁾の諸面から研究し報告した。本報は東京東北郊にある千葉縣松戸市を例に選び、都市の發展過程の面にあらわれた衛星都市の性格を考察したものである。

2. 松戸の地理的位置と集落の生成 松戸は千葉縣の西北部に位置し、下總臺地が江戸川沖積低地に面する地點にある。臺地の末端には、開析谷によつて臺岬 Prominent Spur である根本臺・相模臺・戸定が丘等が作られ、これらは中世の城址、あるいは古戰場として古くから要害の地であつた。即ち相模臺は北條長時(建長元年、1249)、根本臺は新田義徳(正平15年、1360)の築城と傳え⁽⁵⁾、前者は南方の市川國府臺と共に、里見・北條兩氏の戦つた所で、房總・武相兩勢力の係争地となつた。江戸時代には、江戸への攻撃に有利な地點として、かえつて築城が避けられたが、代官支配地とされ、また松戸金町關所が置かれたのは、松戸の軍事的價值を示している。

一方、江戸川が臺地に接する地點として交通上の要地であり、渡頭集落としての起源は古く⁽⁶⁾、さらに陸前濱街道(水戸道中)の宿場町となり、また江戸川舟路が關東内陸交通上の動脈となる⁽⁷⁾と共に、河岸場集落とし

(1) 拙稿：東京を中心とする衛星都市の發達 日本地理學會 昭和26年5月大會

(2) 拙稿：衛星都市浦和の形成とその生活圏 地理學評論 24卷2號 昭和26年

(3) 拙稿：衛星都市としての浦和の機能 地理學評論 24卷8號 昭和26年

(4) 拙稿：衛星都市の地域的構成—浦和市の場合— 東京學藝大學研究報告 第2輯 昭和26年

(5) 千葉縣東葛飾郡誌 郡教育會 大正12年

(6) 更級日記「鏡の瀨、松里の渡にとまりて云々」

(7) 磯崎 優：利根川の水運—特に河岸場を中心として— 地理學7卷 1~3號 昭和14年

拙稿：東京に於ける水上生活者の生成 地理學評論 23卷7號 昭和25年

* 衛星都市の地理學的研究 第5報

** 東京學藝大學 地理學教室

第1圖 松戸宿の都市構造

- I 渡頭地區 II 南端地區
 III 宿場町地區 IV 北端地區
 V 河岸場地區

(2) 南端地區 濱街道から分れ、市川八幡方面に向う道路に沿う地區で、あまり特色はない。現在は上記の道路變更で、北半は國道(もとの濱街道)に面している。

(3) 宿場町地區 宿の人心で、問屋場・本陣・脇本陣⁽¹⁰⁾を中心として、馬持・馬差・旅籠屋等、陸運並びに宿泊關係の機關が集中し、商店も多い。商店の中には、酒食商というのが相當あるのも注意される。この地區は現

て發展した。

3. 松戸宿の都市構造 こうして發達した松戸宿は、どのような都市構造をもつていたであろうか。江戸末期のものと傳える町割圖⁽⁸⁾を見ると、上記の渡頭・宿場町・河岸場の三地區が松戸の都市的核心を形成していたことが認められる。同圖には1戸毎の職業・家號・名前を記載してあるので、この圖によつて地域區分を行つたのが第1圖であり、また地域別に職業分類を行うと第1表となる。今、この町割圖や他の資料によつて、各地域の特色を概観すれば、次の通りである。

(1) 渡頭地區 陸前濱街道が江戸川を渡る地點で、渡頭に船問屋⁽⁹⁾があり、船持・船乗等の水運關係者が多い。また船大工・旅籠屋等も散見される。渡しの對岸、金町側に松戸金町關所があつた、この渡しの地點には明治になつて葛飾橋が架橋されたが、大正8—9年頃、現在のように下流に移しかえられ、道路も變移したので、この地區の機能は全く失われ、現在は裏通りの住宅地となつている。

(8) 松戸宿家並繪圖 徳川家所藏

(9) 梨本多兵衛、この船問屋は渡船を扱つたのではなく、江戸川の川舟の回漕に從事したものである。その點でここは渡津であると共に河港の役割も兼ねていた。梨本家はその後の堤防工事によつて現在は少し位置を變じて残つている。渡船を扱う川會所は松戸にはなく、渡舟場最寄の百姓家を借りて船會所にし、船守は年々宿内の町の廻り番とし、渡舟場近くにいる船頭に仕事をさせていた。(宿方明細書上帳等)

第1表 松戸宿の地域別職業分類 (地區番號は第1圖參照)

地 區		I	II	III	IV	V	計
職 業							
陸運關係 (問屋場, 馬持, 馬差等)		1		4			5
水運關係 (船問屋, 船乗, 船持等)		10				6	16
宿泊關係 (本陣, 脇本陣, 旅籠屋等)		2	1	10	3	13	29
商 業		11	14	44	68	51	188
工 業(酒造, 大工, 鍛冶屋等)		2	3	6	14	5	30
日 雇 稼			1		4	9	14
そ の 他 の 職 業		2	5	5	8	9	29
無 職			2	8	8	6	24
物 置 ・ 明 家				1		10	11
社 寺			1	4	4		9
計		28	27	82	109	109	355

なおおむね商店街となつている。

(4) 北端地區 街道に沿うが宿の中心から離れ、商業・工業(酒造・染物・大工等)が主である。

(5) 河岸場地區 江戸川に面した河港で、弧状をなし、南部は納屋河岸で、船問屋⁽¹¹⁾を中心に船持・船乗等の水運關係者が多く、また荷役を擔當したと思われる日雇稼や、江戸に燃料を積出した葉柄屋などの商人が見られる。北部は平潟^{ひらた}(平方)と呼び、旅籠屋が多いが、これは川舟船頭の遊興地で普通の旅館ではない。かつて江戸川は松戸の上流で大きな蛇行を行い、樋野口本田の東側を廻り、平潟の北を通つていた。このため最初の河岸は平潟に發達したが、享保16年(1731年)にこの蛇行を避けて樋野口本田の西に堀割を作つて通じ⁽¹²⁾、納屋河岸が發達したのである。平潟に本河岸の名があるのは、このためである。しかしその後も平潟には入江があつて船が入り碇泊したが、荷揚げは納屋河岸に譲つたのである。

納屋河岸については、別の古圖⁽¹³⁾があり、これには御用河岸や會所・

(10) 「本陣建坪70坪餘玄關附門御座候宮前町宗藏：脇本陣建坪53坪玄關附門御座候同町隼人：問屋場壹ヶ所字宮前町問屋1人年寄1人帳附1人馬差1人」(宿方朗細書上帳，文化元子年御改による) これらは現在の警察署附近にあつたか残つていない。

(11) 青木源内家で現存し、舟運史料を多く傳えている。

(12) 江戸川縁及葛西用水路圖 安政5年 徳川家所藏

(13) 納屋河岸圖 青木家所藏

御料所などの名が見え、當時の河岸の状況が偲ばれる。納屋河岸は江戸川の攻撃斜面にあり、川の水深が十分にある好位置を占めていた。そして江戸川上流や、利根川の本支流、背後の内陸地方からの物資を江戸・行徳方面に運送した重要な河港をなしていたのである。

こうして松戸は渡津・宿場・河岸場の三機能をもつて発展し、「宿方明細書上帳」⁽¹⁴⁾によれば、文化元年（1804）には宿内惣家數 362 軒、人別 1426 人（男 726、女 700、他に召仕 70 人）であり、本陣・脇本陣各 1 の他、旅籠屋 28 軒（大 8、中 7、小 13）があり、御定人馬 25 人 25 疋を備え、また宿内諸商人は 118 軒を數えていた。しかしその都市形態は、街道に面する帯狀の市街で、「裏通りは田畑又は松雜木林又は惡水堀等」であつた。

4. 地方中心的機能の發達 このような交通上の好位置は、自ら松戸の地方中心的機能を發揮させるようになつた。松戸宿は定助郷 21 村、大助郷 21 村、加助郷 22 村⁽¹⁵⁾をもつて近傍村落との關係が深く、また四九の六齊市が開かれて、松戸をして附近の商業中心地たらしめた。

江戸川の船運もまた、松戸の地方中心的機能を強化した。明治になつてからも、和船の他、交通革命初期の外輪蒸氣船が東京から野田・銚子方面へ運航するのに、松戸に寄航した⁽¹⁶⁾。鐵道の開通（明治 29 年田端・土浦間開通、松戸驛を置く）は次第に水運を壓迫し、遂に之を衰滅させたが、鐵道・トラックによる物資の輸送は松戸の商業機能、特に近村農産物の集散地としての地位を持続させた。

また、明治以後松戸には東葛飾郡役所（後に地方事務所）が置かれ、政治的にも地方中心都市としての機能を果していた。昭和 5 年の國勢調査⁽¹⁷⁾では、當時の松戸町へ他の町村から従業又は通學のため日々移動集中してくる人員は 603 人であつた。しかし當時既に松戸町から東京へも 421 人の移動（松戸から他市町村への移動總數は 553 人）が見られ、次項に述べる衛星都市化も進みつつあつた。

5. 衛星都市としての發展 このように地方都市として發達してきた松戸町に對し、東京の發展に伴う影響が及んで、その衛星的役割を演じさせ

(14) 文化 2 年書上、天保 13 年寫 青木家所藏

(15) 前掲 14

(16) 利根川丸扣 明治 4 年 徳川家所藏、松戸宿輸出入之船稼并荷物取調書 明治 8 年 青木家所藏、川岸場船賃表 大正 13 年 徳川家所藏等

(17) 昭和 5 年國勢調査報告 第 3 卷下、従業の場所

るようになってきた。松戸が都市向青果物出荷の一中心となつたのも、その一つのあらわれである。また大正 8 年、陸軍工兵學校が相模臺に開設されたのは、戦時中までの東京防衛地域の一環であり、立川・市川・所澤等の都市と類似している。戦後は同校の千葉大學工藝學部への利用、高等園藝學校（戸定が丘）の同大學園藝學部への轉換があり、近郊學園都市としての松戸の一方向を示している。

さらに大きな變貌は、東京通勤圏の擴大による松戸の郊外住宅地化である。これには、大正 12 年の關東大震災、昭和 11 年の省線電化並びに今次大戦による東京都民の戦災及び疎開が促進して力があつた。またもとから松戸に住んでいた人々の内に、東京へ通勤通學する人がきわめて多くなつた。松戸は上野から 30 分以内の位置で、都心にも便利であり、これが近郊住宅地化したのは、當然の傾向である。ただ中央線・京濱線・東北線方面に比して、電化が遅れたために、通勤圏の擴大が立ちおくれを見せたことは否めない。しかし近年の著しい發展は人口の増加（第 2 表）にもよくあらわれており、遂に昭和 18 年市制を施行し、その後東方・北方の廣大な農村地域を合併して、面積 53・21km²、人口 5,2531 の都市となつたのである⁽¹⁸⁾。

第 2 表 人 口 の 變 遷

年 次	調査時の市(町)域 による人口	現市域に組みかえ た人口	備 考
大 正 9 年	7616	2,0959	
14 年	9655	2,4454	
昭 和 5 年	1,0600	2,7097	
10 年	1,8597	3,2879	昭和 8 年閉村併合
15 年	2,4446	3,2867	昭和 13 年八柱村併合
19 年	3,7011	3,7011	昭和 18 年高木・馬橋 兩村合併
21 年	4,6291	4,6291	
22 年	5,4513	5,4513	
23 年	5,1297	5,1297	
25 年	5,2531	5,2531	

こうして松戸は地方都市的機能と近郊住宅地的機能とを合せ持ち、衛星都市としての特色をよく示している。これは市民の來住年代や、日常生活

(18) 松戸市勢要覽 松戸市役所 昭和 25 年

第3表(1) 市民の來住年代

來 住 年 代	世 帯 數	%
昭和 5 年 以前	2601	43.7
昭和 5~10 年	535	9.0
昭和 11~19 年	1440	24.2
昭和 22 年 以後	1377	23.1
計	5953	100.0

他に不明 628 人がある。松戸市役所が某氏の協力によつて昭和22年2月、隣組單位に、市の全地帯の約70%について調査したものによる。

圈の上からも認めることができる。昭和22年2月松戸市⁽¹⁹⁾が行つた生活實態調査(第3表)は、近年に於ける來住者や東京通勤者の多いことをよく示している。

そしてこれらの新住宅地は、既に低地部に舊市街が充填していた結果、自ら東部の臺地に發展した。今後も臺地方向に伸長の餘地をもつ松戸市と

第3表(2) 通 勤 先

通 勤 先	人 數	%
松 戸 市 内	1756	36.7
汽 車 利 用 (馬橋以遠)	192	4.0
省 電 利 用 { 常 磐 線 内	1013	(内) 37.7% 43.7 6.8 2.2 5.5 4.4 100.0
日暮里・品川間	1173	
品川以西	182	
川口浦和方面	58	
中央線内	139	
總武線	116	
計	2681	55.9
京成バス利用 { 市川方面	118	3.4
六實方面	44	
計	162	
總 計	4991	100.0

(註) 資料は(1)に同じ。この通勤者数は調査人口の14%に當る。當時は國電は松戸止りであつたから、汽車利用は馬橋(常磐線の次驛)以遠となる。

しては、廣い農耕地を控えて食糧の自給できる田園住宅都市としての發展に希望があると思われる。

(19) 松戸市都市計畫資料(原稿)松戸市役所 昭和22年

6. 都市機能と都市形態との関係 上に述べた松戸の變遷を、市街の平面形態の發展から纏めて考察するために、年代を異にする數葉の地圖⁽²⁰⁾を比較してみた。そして増加した市街を順に記入して行くと、第2圖のようになる。即ち松戸には大きくみて、次のような三つの時期がみられる。

第2圖 都市形態の發展

第2期 大正6年の圖は鐵道の開通による新しい商店街もでき、裏町も發展し、鐵道西部の低地部に市街が充填した形態を示す。これは郡役所所在地、地方商業中心地として發展した地方都市的機能の時期である。

第3期 昭和19年の圖は、鐵道東部の臺地に東京近郊住宅地の延長附加された形態が見られる。これは近年の發展による衛星都市的機能の時期を表現する。現在(昭和26年)はこの形とほぼ同様であるが、東部住宅地がより充實してきており、昭和27年に松戸驛東口が開設される豫定はこれを裏書している。

(20) 5000分の1 松戸驛 明治20年測量明治12年製版 陸軍教導團、2萬分の1 千住 明治42年測圖 陸地測量部、5萬分の1 東京東北部 大正6年修正測圖陸地測量部、2.5萬分の1 松戸 昭和19年修正測圖 地理調査所等

(21) 筆者はかつて三重縣桑名市を調査し、宿場町・渡津・市場町・城下町から地方商業都市を経て工業都市化した同市の發展をまとめたことがある。

拙稿：桑名の都市形態の變遷(未發表)昭和14年

(22) 前掲 4

わめて類似している。このような變遷は、さまざまの相違はあるが、大都市の近郊都市に共通なものがあり、それらの共通性と相違性とを順次考察して行く積りである。

擱筆に當り、懇切な御指教を載いた青野博士と、調査研究上多大の便宜を受けた松戸市役所、並びに徳川・青木兩家に對し、深く感謝の意を表する。
(昭和26年12月1日受理)

Growth of Matsudo as One of the Satellite Cities of Tōkyō.

Seiji Yamaga.*

The writer tried to study the characteristics of the satellite cities from the view point of the development of a city, and gave an example to Matsudo city in Chiba prefecture.

Matsudo has developed as a ferry-town, station-town and a port-town on the river of Edo, and then became the commercial and political center of its vicinity. By the expansion of Tōkyō, Matsudo came to be joined with the residential districts, and turned into a satellite city of Tōkyō.

In accordance with the change of the city functions, Matsudo had several different forms as follows.

City Functions		City Forms
1st period	station-town	in a line along the road.
2nd period	local center town	occupying the low-land between Edo river and the railway.
3rd period	satellite city	extending to the east of the railway.

* Geogr. Inst., Tōkyō Gakugei Univ.